

渥美半島の野生イノシシ根絶の実現可能性について

1 実現可能性の検討にあたり参考にした論文

『野生動物管理策の前提として不可欠な「実現可能性分析」～外来生物対策における先行事例を踏まえて～』（北海道大学 池田教授）

- ・ 理想的には「根絶」を目指すべきであるが、侵入から相当の時間が経過している場合や、対象種の繁殖率が著しく高い場合など、対象動物や侵入状況によって根絶が不可能であることも多い。そのような場合には、「地域的な封じ込め」、「個体数コントロール」、「何もしない」という管理手法の選択肢からいずれかを選ぶ必要がある。
- ・ 検討方法に関しては、一般的にはまず過去の成功事例[※]と状況を比較検討することからスタートすることが多いが、過去に根絶成功事例がない場合は、

- 1) 防除手法が全ての個体に適応可能
- 2) 死亡率が新規個体侵入率（繁殖率）を上回ること
- 3) 再侵入の可能性がゼロ

という最低でもこの3つの条件を満たす必要があり、さらには、

- 4) 低密度下でのモニタリングが可能
- 5) 適用する技術が法的にも社会的にも許容可能なものであること
- 6) 利益がコストを上回っていること
- 7) 組織的サポートが保証されていること

という条件まで満たした場合に根絶が可能と判断される。

※ 江戸時代に長崎県対馬でイノシシを根絶した事例があるが、時代背景が異なり比較対象にならない。それ以外に根絶事例はない。

2 検討内容

	根絶に必要な条件	現状	評価
1	防除（捕獲）手法が全ての個体に適応可能	山麓付近の個体に対してはわなを網羅的に設置しているが、山中の個体に対しては地形が険しく、進入路もないため、十分なわなの設置が困難 ^{※1} 。	？
2	死亡率が新規個体侵入率（繁殖率）を上回ること	イノシシは多産で繁殖力が強い。山中や樹林帯奥等で捕獲を逃れた個体が、好適な生息環境下 [*] で繁殖により個体数を増加（回復）させるおそれがある。 ※渥美半島は落葉広葉樹林や身を隠せる繁みが多くイノシシが好む環境である。 また、田原市では30kg以上のメスの捕獲割合が他地域に比べ低い傾向 ^{※2} 。	？
3	再侵入の可能性がゼロ	移動防止柵により静岡県側からの流入を抑制（ただし、海岸でイノシシの痕跡情報あり）	△
4	低密度下でのモニタリングが可能	撮影状況、痕跡、目撃情報を活用	○
5	適用する技術が法的にも社会的にも許容可能なものであること	鳥獣保護管理法で定められた猟法（わな猟、銃猟）	○
6	利益がコストを上回っていること	利益（養豚場での豚熱発生による損失回避）は多大だが、捕獲では、獲れば獲るほど捕獲が難しくなって費用がかさみ、最後の10%を捕獲するのに予算総計の90%を使うと言われている。	？
7	組織的サポートがしっかりしていること	田原市内ではイノシシによる農業被害がほとんどないため、地域ぐるみの対策が進まない。直接の利害関係者である養豚業者が防疫の観点から捕獲に参加できない。 生息密度の高い一部地域において、指定管理捕獲事業の実施に向けた合意形成が難航 ^{※3} 。	△

3 検討結果

現段階で上記1～3の条件を満足しておらず、**根絶の実現は難しい状況**。また、根絶には、長期間かつ多大な費用と労力が必要。

⇒根絶が困難な場合でも、渥美半島は養豚の一大産地であり、アフリカ豚熱の脅威も迫っていることから、野生イノシシの捕獲強化は継続し、「**個体数コントロール**」が必要。

※1【補強案】

- ① 指定管理捕獲事業で山中の捕獲に着手
- ② 効果的捕獲促進事業で外部捕獲者の活用を検討

※2【補強案】

- ③ 捕獲者への捕獲技術向上研修会の実施
- ④ 指定管理捕獲事業で冬期のくくり罠の増強

※3【補強案】

- ⑤ 地域との合意形成に向け説明を重ねる